

5. 同志社社史資料センター



新島遺品庫外観

基本データ

開設年月日：2004年

所在地：〒602-8580 京都市上京区今出川烏丸東入（今出川キャンパス）

HPアドレス：<http://d-arc.info/>

刊行物：『同志社社史資料センター報』、『新島研究』、『同志社談叢』、同志社編『新島襄の手紙』（岩波文庫 2005年）、同志社編『新島襄教育宗教論集』（岩波文庫 2010年）、『同志社社史資料センター叢書』（2012年より刊行予定）ほか

所蔵資料点数：約3万点

専任職員：参与1名、事務長1名、常勤社史資料調査員1名

調査日 2011年8月9日

場所 同志社大学 同志社社史資料センター

お話しいただいた方

同志社社史資料センター事務長 落合万里子氏

同志社社史資料センター社史資料調査員 小枝弘和氏

調査者 鈴木拓也（記録）、田窪直規（写真）

富岡勝、増田大三

1. 「貴学における大学アーカイヴズについて」

1-1 設置目的・設置経緯 —新島襄関係資料と大学アーカイヴズ—

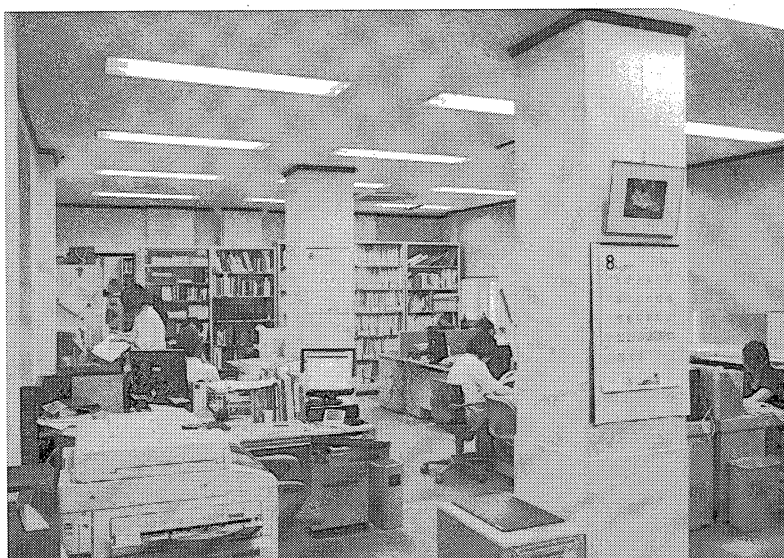
同志社大学同志社社史資料センターは、1963年に同志社の法人本部に設置された同志社社史史料編集所を前身とする。社史史料編集所は、『同志社九十年小史』（1965年）という年史編纂と創立百周年記念事業の準備のために設置された組織であり、私立大学アーカイヴズの中では、慶応義塾大学・早稲田大学に次ぐ早い例である。

社史史料編集所の設置以前には、同志社では主に創立者新島襄に関する資料を収集・保存していたが、社史史料編集所の設置によって、新島関係資料とともに同志社社史関係資料を扱う大学アーカイヴズが誕生することとなった。1983年には同志社社史資料室と改称し、1995年の機構改革によって法人から大学の組織（人文科学研究所所属）となり、クラーク記念館から現在の啓明館1階に移転した。この間に『同志社百年史』全4巻（1977年）、『新島襄全集』全10巻（1983～96年）の刊行が行われている。2004年には同志社社史資料センターとして人文科学研究所から独立し、現在に至っている。

同志社における資料収集は、創立者新島襄が意識的に資料を残したことに始まる。さらに新島の死後、新島に関する資料が続々と同志社に寄せられた。これらの資料を保存・修繕するために、新島没後50周年の1940年に新島遺品庫の設置が公表され、建築家ヴォーリズの設計によって1942年に竣工した。現在は社史資料センターの管轄下にある。

1-2 組織形態

同志社社史資料センターには、所長1名（現在は文学部教授の兼務）、参与1名（定員外）、事務長1名、社史資料調査員2名（常勤嘱託職員、非常勤嘱託職員）、一般アルバイト3名が置かれている。社史資料調査員は、大学としては研究能力のある人を採用すると定めているわけでないが、実際には高い研究能力が求められる。膨大な資料を扱い、



事務室での作業風景

問い合わせに即応する必要があるので、同志社の歴史や新島襄について熟知していなければならない。このため人事異動の対象外となっており、人選もセンター委員会で行っている。

同志社社史資料センターは大学の組織であるが、扱う資料や事業は法人全体に及んでいる。このため同志社社史資料センター委員会が設けられ、法人内のすべての学校（女子大・中学校・高等学校など）から選出された委員が集まり、センターの事業について審議している。またセンター委員会の中にセンター運営委員会が置かれ、センターの事業について計画立案を行っている。

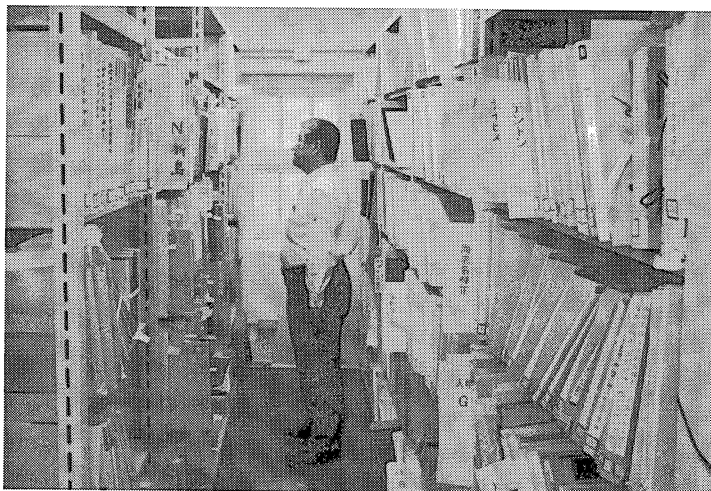
1-3 活動内容

同志社社史資料センター規程では、センターの事業として、同志社社史資料の研究、収集、整理、保存および公開、新島研究に関すること、同志社社史の編纂、『同志社談叢』の発行、Neesima Room の管理運営、新島遺品庫の管理運営、新島旧邸の管理運営、新島襄および同志社建学の精神について啓蒙活動を行うこと、などを定めている。

このうち資料の収集については、保存期間の終了した文書をすべて集めることはスペース的に不可能で、基本的にそれぞれの部署で持っている。各部署で保存年限が過ぎた文書を廃棄する際には、センターに声をかけるように働きかけ、事務長や社史資料調査員が引き取りに行っている。また各学校の卒業式の式次第など、現用であっても保存すべき文書は、出来次第コピーして送ってもらうように依頼している。

かつて法人本部にあった頃には、総長の直轄であったため、法人内の各学校の文書が自然に集まってきた。しかし現在は大学の組織になっているので、大学と法人本部の文書は入ってくるものの、各学校の情報は入りにくくなっている。そのため同志社社史資料センター委員会が法人全体の情報を収集する場ともなっている。

資料の公開は、閲覧に来られた方には個別に対応しているが、外部には一次資料の目録を公開していない。新島遺品庫については、6000点を超える所蔵資料のデータベースをホームページで公開しており、デジタル画像を入手する



書庫

ことも可能である。

社史の編纂については、14年後に創立150周年を迎えるので、材料を集めておく必要があり、紀要は史料紹介が中心となっている。150年史の編纂には法人全体で編纂委員会を立ち上げる予定であるが、社史資料センターが中核となることが予想される。

研究活動は、新島研究を行う第一部門研究と同志社社史研究を行う第二部門研究という、二つの研究会に分かれているのが特色で、前者は『新島研究』、後者は『同志社談叢』という紀要を刊行している。

展示活動は、かつては新島遺品庫の中で行われていたが、1995年からはハリス理化学館（国指定重要文化財）の2階にある Neesima Room という展示室で行われている。年に2回、春学期（4～7月）と秋学期（10～1月）に、新島襄や同志社に関する企画展を実施し（入場無料）、リーフレットも作成している。近年のテーマは、「新島八重の生涯」（2009年秋学期）、「幕末と同志社」（2010年秋学期）、「まかれた種—神戸女学院と同志社—」（2011年春学期）などである。

展示は自校史教育にも活用されている。神学部の教員が主に担当する「同志社科目」という科目があり、神学部以外の学生も受講できる。その授業の一環として、学年・学科ごとに教員が展示に学生を引率してくる。授業内容は新島襄の話が中心で、テキストも用意されている。同志社大学編『新島襄検定100問～同志社大学の軌跡～』（らくたび文庫、2008年12月刊）という本も刊行されている（企画部広報室広報課が作成）。



同志社大学編

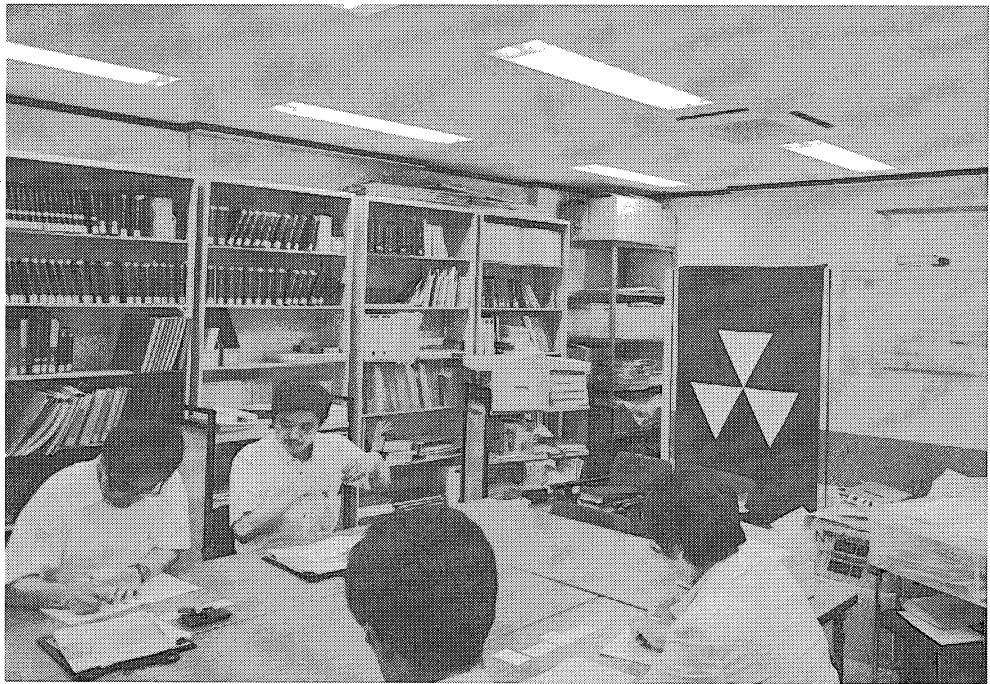
『新島襄検定100問～同志社大学の軌跡～』

2. 「貴学にとっての大学アーカイヴズの意義」について

同志社の場合、創立者新島襄の知名度が高いので、旗を振らなくても、新島に対する人々の関心は高い。しかし創立者だけではなく、その後の歴史にも注目する必要がある。大学アーカイヴズは、大学の歴史を保障する唯一の部署である。これまでに生成された資料を

整理・保存して公開することは、大学の歴史を語る上で不可欠であり、自校史教育のためにも重要である。

同志社の卒業生にとっては、新島襄が共通の話題であると言われる。学校は同窓生に支えられている。卒業生が帰ってくる場所があること、そこについて知っておくことは、自校史教育の意味であり、大学アーカイヴズの役割でもある。



事務室での調査風景

3. 「国公立大学・私立大学における大学アーカイヴズの意義」について

国立大学とは文書の保存に関する法律の枠組みが異なるが、私立大学には創立以来の流れがあり、独自性があるので、それを保持しておかなければならない。

大学アーカイヴズの意義は、原点の確保にある。ここを外すと大学の存在意義さえ失われかねない。大学が着実に発展していくためには、しっかりとした源が必要である。

また、大学アーカイヴズは、一旦不必要になったものを、後世必要になるまで保管しておく「学校の歴史の金庫番」のような役割を担っている。大学における他の仕事は前に出るが、アーカイヴズは後ろ（足跡）を守る仕事である。

いつでも見学者を歓迎できるウェルカムの状態を作っておくことが重要。それによって大学アーカイヴズの認知度も広がっていく。

調査を振り返って

同志社には新島襄の教えと遺品が多数残されており、学内の建築も、国指定重要文化財5棟を始めとして、その多くが国登録有形文化財の指定を受けている。社史資料センターが入っている啓明館（旧図書館）も1920年竣工の国登録有形文化財である。明治初期の木造建造物である新島襄の旧邸も、社史資料センターの管轄であり、一般公開されている。そのような環境の中で、早くから大学アーカイヴズが設立され、調査・研究・保存・活用がなされてきたことには、大学としての風格を強く感じた。

近畿大学の場合、ここまで豊かな内容をそろえることは恐らく不可能であるが、大学の歴史を深く掘り起こす中で、どこまで豊かな歴史を語れるか、今回の調査を参考にしながら、今後の調査・研究を進めていきたい。

お話を伺った落合事務長、小枝社史資料調査員には、非常に親切丁寧に対応していただき、調査は長時間に及んだ。大学アーカイヴズの発展のためには、見学者をいつでも歓迎することが大切という教えも、今後しっかりと実践していきたいと思う。

（鈴木拓也）



同志社社史資料センターのある啓明館入口